研究の栞

日本古建築研究の栞（第十八回）

工學博士　天沼俊一

第二十六　鳥衾

『三才圖會』

鳥衾瓦、卽鴟尾也壯瓦之長彎者似沓形在棟頭鳶鴉毎休于此故有履形鳥衾等之名

『工業字解』

鳥臥間、又鳥衾ト書ス○――ハ鬼瓦ノ上ヨリ横ニ斗出シタル材ノ名ナリ本邦古來ノ宮殿其他ニ多ク見ル所ナリ現今ノ清國ノ建築ニモアリ……

……

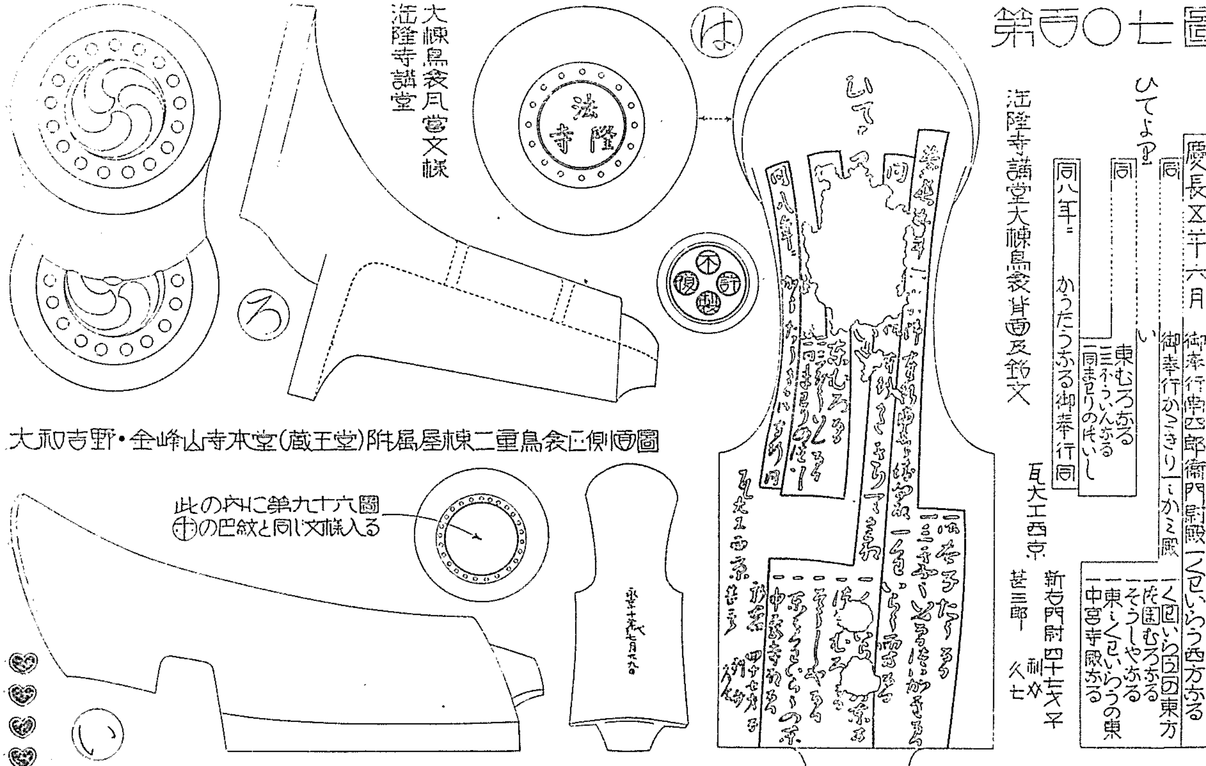
『建築字彙』

大棟又ハ隅棟ノ鬼板ノ上ニ突出スル丸瓦ヲイフ。獅子口ノ上ニアル三ツノ丸瓦ハ鳥衾ニアラズコレニハ「經（キヨー）の巻（マキ）」ナル名アリ。鳥衾ヲ雀瓦ト稱スル人アリ。又鴟尾ヲモ鳥衾ト稱スル人アレドモ如何ニヤ

右のうち建築字彙のが一番完全であらう、其形は第百〇七・百〇八圖に掲げてあるから、夫れ等を見れば判る筈である。

何故にこの種の瓦を鳥衾といつたかといふと、鳶や鴉が來て休むからだと三才圖會にあるが、實際こゝに鳥がとまつてゐるのは、私共は常にみる

第四〇七圖　室町桃山時代鳥衾各種



法隆寺講堂大棟鳥衾背面及銘文

大棟鳥衾風宮文様　法隆寺講堂

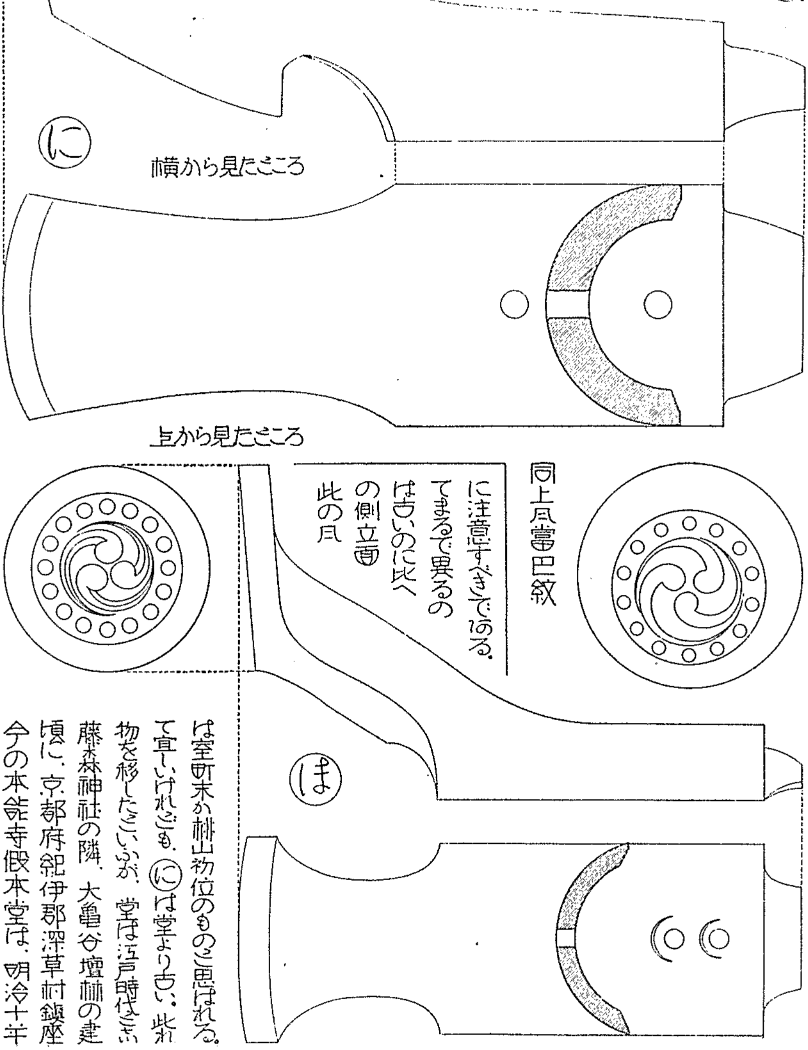
大和吉野・金峰山寺本堂（蔵王堂）附属屋棟二重鳥衾正側面圖

法隆寺南大門大棟鳥衾（永享十年七月廿九日銘）背面及側面圖

大正十二年七月六日（撮）十六日・火曜・好晴

第百〇八圖　本能寺假本堂
大棟及降棟鳥衾貳種

大正十二年六月廿二日實測・七月參日製圖・金曜・好晴・



今の本能寺假本堂は、明治十年頃に、京都府紀伊郡深草村鎮座藤森神社の隣、大亀谷壇林の建物を移したといふが、堂は江戸時代といふて宜しいけれども、(に)は堂より古い。此れは室町末か桃山初位のものと思はれる。

ところである。此冤を「鳥休」といふ人もあるのは其爲めであらう。私の舊知に榊原弘久といふ人があるが、昨年春鳥衾について書面を以ていろ〳〵の質問を受けた。其うちにどうして斯様な冤が出來たかに對して、私にも判らぬから自己流の愚見を述べ尚ほよく考へてみると申送つておいた所、更に六月二十九日の信書の中に

……六十年前淺草觀音堂の屋上大棟の兩端に大なる金網を裝置されそこへ鴻の鳥が巢を構へ雛と共に親子の鴻が遊び居り候事參詣の都度實見致し之れが明治となりては狩獵が盛に行はるゝに至り全く去て再び來らず金網も不用となりて取卸され今は其影を存せず……

とあつた。面白い事である。かうなると鳥が一時休む所の騷ぎでなくて、半ば人工も加はつてはゐるがほんとうの寢床になつたので正に鳥衾である。

鳥衾一に「御代冤」といふ樣である。これは地方的の名稱か或は一般に用ひられたものか其邊はよく判らぬ。多分「ミヨカハラ」と訓むのであらう。

當麻寺鳥衾の銘に

（一）正保五年
みろくいん
たけの坊
ふ□（以下釘孔）
此御代冤
はそん左兵衞仕れ
三月吉日

とあるし、も一つのには

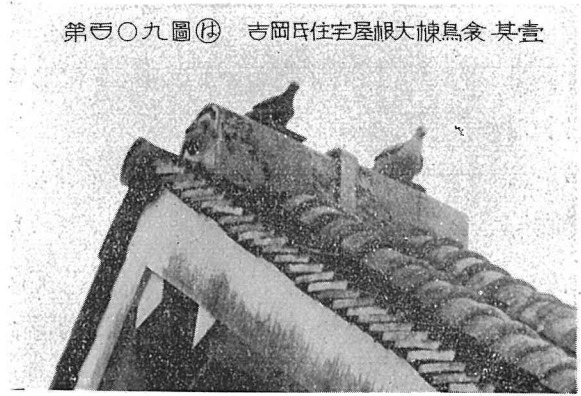
（二）正保五年
をくの□□ん□かん坊（地藏院）
ちさういん（文殊院）
もんしゆいん
此御代冤
はそん左兵衞仕れ
三月吉日

第百〇九圖(い)

奈良市油坂町百二十三番地　吉岡新太郎氏住宅

第百〇九圖(ろ)
吉岡氏住宅屋根

第百〇九圖(は)　吉岡氏住宅屋根大棟鳥衾　其壹



第百〇九圖(に)　吉岡氏住宅大棟鳥衾　其貳

とある、何れも正保五年三月に左兵衞といふ瓦大工が造つてゐるのである、だから廣く用ひられた名かどうか不明である。

鳥衾の起原はいつ頃からか知らぬが、多分飛鳥時代からであつたらうと思はれる。何故かといふと、鬼板を其位置に固定すべき何等の設備がない時は勿論、例へ子房の中心へ孔をあけてある場合にせよ、鳥衾の顎——鬼瓦の上に引かけるところに切込みがあるのを假にかく呼ぶ——でゞも引懸けなければ、頭の上がさみしくて始末がわるいのと同時に「雁振瓦（ガンプリ）」——大棟又は降棟の最上部に並べてある瓦、古くは圓瓦、鎌倉位から以降は横斷面が唐破風の樣な曲線をもつた瓦——の終るところの始末がつくまい。けれども實例は未だみたことがない。玉蟲厨子の宮殿屋根の降棟の末端をみると、疏瓦が鬼板の上から突き出てゐる。

斯様な點から考へると、雁振瓦が圓瓦即ち牡瓦と同じであつた古代に於いては、第百〇七・百〇八圖に於いてみる如き所謂鳥衾は未だ出來なかつたので、雁振瓦が唐破風式曲線をもつ樣になつてから、自然今の樣な形のが發明されたのではあるまいか。假りさうすると、飛鳥時代のは勿論、奈良平安のもないのであらう。卽ち

飛鳥より平安に至る期間のは、普通疏瓦の鼻に幾分の增しと反りとをつけ、瓦當を少しく厚くして下端に鬼瓦の上端に引かゝる丈けの切り込み卽ち顎をつくつたものであつたらしいと思ふ。

此所に「幾分の增しと反りとをつけ」「瓦當を少しく厚くし」とかいたのは、さうしなければ恰好がとれぬから、多分さうしたらうといふ想像をしたのであるが、どの位の程度にやつたか判らぬから甚だ曖昧な書き方をしたのである。併し僅かであつた事は、室町以降時代が新しくなるに從ひ、漸く首が長くなつて行くのからみても、昔程少しであつたと思はるゝのである。

一つの建物に於いては、鬼瓦と鳥衾との數は同じである筈である。夫れが落ちて土に埋る時分には、厚手の一かたまりである鬼瓦は割合に毀れないで其まゝ殘り得るが、鳥衾の樣なものは殆んど必ず小さく壞れて了ふ、これが此種の瓦に古代品の遺物のない一原因であらう。去る大正三年十二月、大和吉野の金峰山寺本堂西北隅から瓦の破片が大分に出たが、其內確かに鳥衾と認められるゝもの二つ計りあつたけれども、何れも瓦當に近いところ丈けのもの許りであつた。

鎌倉時代のはそこいらの寺の屋根で見た樣な氣がしてゐるが、どこでいつ見たか今思ひ出せぬ。けれども唐破風式雁振の出來たのは此時代だから圖の樣な形のが出來たのは當代からとしておいて

よからう。

室町時代のは可なりある。銘文のある確實なのは第百〇七圖㋑で、これには製造の年月日が背に篦でかきつけてある、此の他この南大門には

永享八年七月六日の銘あるもの一。（東南隅降棟一の衾）

永享十年七月廿九日のもの四。（南側平葢東、東妻降南、西妻降南、西北隅降一の衾）

ある。殘りの十二も皆同時代であるが、年月日のあるのは以上の六つである。

鳥衾といふ名は少なくとも室町時代からあつた證據にならうと思はるゝから、左に銘文の一を掲げておかう。卽ち

法隆寺南大門東妻南側のに

（隅）（後）（道）（造）（造）
四ツノスミワノチノチイツクリノトキツクルナリ

八枚ノ内

永享十年戊午七月廿九日瓦大工壽王三郎
（作）
とり衾壽王五サクナリ

とあるので判る。

奈良縣磯城郡平野村大字飯高（ヒダカ）に瑞花院（ズイケヰン）といふ寺がある、嘉吉三年に上棟をした立派な建築であるが、其大棟鳥衾の一に

カノトノ
カキチ元年五月十三日
トリ

（橘）
瓦大工タチハナノ吉重
（ユウ阿彌陀佛の略）
ユウアミトシ六十四ニマカリ
ナル

といふ銘文があるが、前のと同一人の作である。此れ等は其當時大して深い意味があつて書いたのではあるまいが、今となつては貴重な銘文となつたのである。此の時代になつてから瓦屋の親方までがユウ阿彌陀佛とやり出したのは大に興味のあることである。此の瓦は永享十年から滿三年とはたゝぬのに、其形は全然異なつてゐる。卽ち首は殆んど永享の倍となり、雁振の部分はずつと短

くなり、そして反りも急になつたのである。これは偶然かうなつたとするよりは、絶えず工風をして漸々其形等も改良していつたとすべきであらう。

同圖(ろ)は様式上當代と認められ、其上多分二つとあるまいと思はれるものである。此れは去る大正三年十二月吉野山へ行つた時、金峰山寺本堂の後ろ側に一寸した附屬屋があつて、其棟にのつてゐたものであるが、餘り異つた形をしてゐたので寸法をざつと取つておいたものである。此の堂は其後大修理をしたので面目を一新したさうであるから、今でも此の附屬屋があるかどうか知らぬ、併しこの寫生は其年其月十一日の事だから、其時は確かに其位置にあつたのである。私は鳥衾の種類は隨分に澤山みたつもりだが、こんな二重のは後にも先にもこれ一つ丈けである。其面についてゐる巴紋は餓鬼巴だが、全體からみると室町の中葉若くは其以後であらう。

桃山時代　同圖(は)は其一例で、背銘で明らかな通り慶長五年のものである。實は此の瓦の全體を寫生して置かなかつたし、寫眞もとらなかつたから、果してこんな風か或は少し位ちがうかも知れぬが、ちがつても大した事はない筈である。室町のに比べると首が長くなり、且つ瓦當が下を向いて來た事丈けは確かである。序ながら瓦の形に關係はないけれども、瓦の銘文は記錄の缺を補ふことが再々あるから、間々眞僞半々の文書等より遙に役に立つものである。だから同圖(は)の右の方に判り易くかいておいた、勿論假名遣の間違もそつくりそのまゝにしておいた。

江戸より現代に至る間には此の傾向が益々劇しくなり、首は愈よのび且つ扁平となり、其先端の平圓盤はずつと下を向いて來る。これは鬼瓦が其後面に於いて完全に大棟の內部に緊結され從て墜落の虞が絶對にないのと、鬼の顏が大分に前の方

に迫出して來たのとに原因すと言へやう。卽ち最早顎で鬼瓦の上端を引懸る必要は全くなくなり、其結果顎は退化して了ひ、其上に首がずつと長くならねば鬼面の前方へ其先端が出ぬから、自然全體の形が一變したのである。

扨てさうなると夫れが瓦當のつけごころに影響を及ぼしてくる。首が扁平になつた以上、そして瓦當は依然として圓い以上、最早今迄の樣なつけ方は到底出來ぬ。左りとて上端でつければ結果は甚だ不滿足である。だから當然首の先を瓦當の下端へつける樣になつたのである。爰に於いて此れも亦木鼻や蟇股と同じ樣に一種の墮落型が出來たのである。（第百〇八圖㋒）。

＊　＊　＊　＊　＊

鳥衾はまた新しくなる程瓦當の形が圓に遠ざかつて來る。總てがさうとは限らぬが、多くがさういふ傾向を帶びてくるのである。例へば㋑の正面

をみると判るであらうが、少しく上下に細長くなり割合に下の方に文樣がつくから、周緣は左右と下方とは同じ巾だが、上丈けが少し厚くなつてゐる。㋺は正圓であるが、これは小さくもあるし、除外例とすることが出來る。㋩に至つては一層下り且つ大分下が狹くなつてきた。卽ち時代が下るに從ひ、輪廓の形は漸く圓に遠ざかつてくるのである。併しながらずつと近世になつて、最後に述べた樣な扁平な轆轤首式のになると、反て瓦當のところは元に戻つて圓となるのである。

＊　＊　＊　＊　＊

最後に時代は極く新しいが、民家の珍らしい鳥衾の實例を紹介しておく。此れは奈良市油坂町の北側で、大軌の奈良終點と油坂停留場との間にある往來に面した家の屋根に上つてゐるのである。此の屋根は元來が藁葺で、其兩端——切妻——丈けが漆喰壁で瓦葺になつてゐる、だから丁度西洋

建築に於ける防火壁の如くである（第百〇九圖ろ）、其實どうせ木造だから火は防げぬが、見たところ如何にも防火の目的にそへるものゝ如く、少なくとも大分心丈夫に見える。卽ち日本式防火壁である。この防火壁の上には棟瓦が二枚のつてゐるが、其横には寶珠、上には鳩の樣な鳥が一羽づつ往來の方卽ち南を向いて止まつてゐる、だから片方に二羽づつゐるのであるが、これは時に眞物の鳥が來て休息する鳥衾から脫化して、瓦の平たい板へ同じく瓦製の鳥を作附にしたものを、圓筒を半截した樣な鬼板の頂上に針金を以て結へつけたのである。下の鬼板へは、向て右卽ち東側のは鬼面の代りに「小槌」、向て左卽ち西側のへは何れも「寶珠」がつけてある。此れは恐らく「打出の小槌」と「寶の珠」とに象つたもので、緣起のいゝものを撰んでつけたのであらう。兎に角かゝる瓦の存在は鬼板と鳥衾の變遷上甚だ面白い事といはねばならぬ（第百〇九圖は・ろ）。

此の場合實用からいふと鳥はなくともいゝのである。雨仕舞は鬼板で澤山である。然るになぜ瓦鳥をつけたかといふと、三つ許りの理由があると思はれる。第一はいふ迄もなく裝飾。第二は鬼板の上から鳥衾が出るのが普通だから、有觸れた形のよりは鳥の形をつけた方が面白い。第三には後に記す如く奈良市及び其附近の農家——今其分布區域を明言し難いが、少なくとも大和生駒谷及び法隆寺の民家にはある——の屋根の大棟の兩端に鳥附の留蓋（後出）を用ふるところから、其樣に眞似をして猶且鳥をつけたのであらう。瓦鳥は何れも飾だから別として、一は眞の留蓋の役をしてゐるのであるが、此れはさう見せかけてゐるけれども事實なくともいゝのであるから、見樣によつては少し大袈裟の言葉かも知れぬが「擬態」といふ字が一番當嵌るだらう。

第二十七　圓　瓦

普通「丸瓦」とかく、桁のことを「圓桁」とは言はずに「丸桁」といふ。だから丸瓦でいゝのであるが圓の字の方が適當である。其上丸桁の樣に音讀するのだと少し語呂も惡いが「マルカハラ」と發音する以上この方がいゝ樣であるからである。

『建築字彙』には半筒形の瓦とある。まことにうまい說明で一言にして盡してゐる、卽ち圓い筒を造つておいて縱に眞二つに切ると出來る。普通はこの形であるが、稀に先が太く本が細いもの、卽ち截頭圓錐體を縱に二等分した樣なのがある。だから「半筒形」といふ內には、圓筒（Cylinder）を半分にしたのと、截頭圓錐（Truncated Cone）を半分にしたのと、二種類が含まれてゐると考へなければならない。

先が太くて本が細いのは、第百十圖に示すが如く、一つの瓦の先端が其前方にある瓦の尾端を覆ふ樣に葺くのである。古くは玉蟲厨子宮殿の屋根がさうであり、新しくは極樂院（奈良市中院町。鎌倉時代）や孝恩寺觀音堂（木積釘無堂といふ。大阪府泉南郡西葛城村。鎌倉時代）の屋根がさうなつてゐる。尤も後の二つは何れも屋根へ上つて調べたことはないから、建物は鎌倉でも此れ等の瓦まで其時代かどうか知らぬが、少なくとも鎌倉時代を降るものではあるまい。其名の起原は知らぬが、兎に角斯樣な葺き方を「行基葺」と呼んでゐる。

圓瓦の內面には殆んど常に布目があるが、これは瓦を製造するに際して自然につくのである。其表面には

奈良時代のものに型押又は篦書で文字を一字現はした——例へば「父」（武藏國分寺出土）・「男」（同上武藏國男衾郡）——のがあるが、これ等は古い方の例であらう。『集古十種』に出てゐる白鳳十一年や和銅二年の銘のあるのは圓瓦か平瓦かすら判らぬし、其眞

僞等を昔しの不完全な復製について、此の際深く研究しないでもよからう。

平安時代のには餘り銘を見出さぬ、今のところ私の知つてゐる唯一の例は

額田部武未

承安肆年(オ次甲午)八月四日

と背面に篦書したもので、これは兵庫縣加西郡下里村一乘寺の藏品で

鎌倉時代ので銘のあるのは今心當りがない、だから止むを得ず次の

室町時代に移ると、今度は澤山にある、元來圓瓦の銘は大概背面にほるものであるが、當代のは裏面卽ち內面に書きつけてゐるのもある。先づ背面の例からかくと。

(一)法隆寺南大門

永享八年六月六日(始)ハシマル

(同)ヲナシキ九月四日(迄)マテ土ウツナリ(打)

(此)(時)又コノトキノシテノ(仕手)人ワ大工ソウ五郎

(左衞門)サイモン五郎殿?又三郎サフ郎太郎

壽王次郎春王丸い上八人[ナ]リ??

永享八年九月五日瓦大工

南大門此瓦ナリ

此の瓦の作者は、當時大和一流の瓦師壽王彥次郎橘吉重といふ人であつたが、私は嘗て此人の書いた銘文の中には、人名の下に敬語の「殿」といふ字をつけたのはない、といふ事をある雜誌にかいたが、これは甚だ輕率であつたので、よく調べてみたら多くのうちに二三はある樣である。これも其一つで、四行目「サイモン五郎」の下は「殿」らしいのである。此件につきこゝでも少し詳細にかいて、此機會に訂正をしてもいゝのであるが、少し緣が遠い樣であるから、この際は遠慮しておき他日に延期しておく。

(二)唐招提寺講堂

（缺損）大講堂瓦也
作者橘吉重
文明九年丁酉三月吉日

もつと澤山あるが、この位にしておいて次に裏の例に移るが、前述の如く裏には布目があるが、兩緣卽ち平瓦の上にのるところと、前の圓瓦の出たところへ被さるところとは、篦で工合よく土をすいてとつてある、だから其部分には布目がない、だからそこへ篦で文字をかくのである。

（一）法隆寺南大門
瓦大工ユウアミ壽王三郎
トシ六十一
大工吉重
永享十年ツチノエ（戊）ムマ（午）ノトシ七月十一日

（二）同
法隆寺　永享十年八月十二日

（三）同
クロツチナリ（黒土）
（南）ミナミノ
（道）ミチノ
（溝）ミソニ
アリコヽ、
ロヲミ□（此行最後の字は一字か二字か不明）
（妙カ）タヘナリ

百五十ノ内

右の内最後の分は文句が甚だ面白いのであるが惜しい事に讀めぬ字があるので充分意味が判斷出來ない。

桃山時代のでは法隆寺西院歩廊のに

西京　此瓦つくり
（「人」かも知れぬが、大概であらう）

慶長九年
三月廿六日
瓦大工　利介（花押）
（こゑ十五歳）

といふのがある、十五の子供にしては大變に字が上手で、花押なんか堂々たるものだ。果して本人の自署なら大分に番狂はせである。

江戸時代にも可なりあるが、餘り知られてゐなさうなのを擧げると、

（一）唐招提寺廢戒壇院のに元祿九年に桂昌院が修理を加へたときのがある、銘に曰く

征夷大將軍母君桂昌院宗子尼公戒壇堂

御修覆　元祿九丙午年　英範□

と、これは私は同じものが二個あつたのを承知してゐるが、何れも一番下の字がよめなかつた。二つも型押で、そこのところ丈け字がうまく押せてゐなかつた。

（二）當麻寺西塔。上部に徑約七分の極印あり

元祿拾五歲　和州高市之郡
　　曾我村住人
壬午三月吉日　瓦師佐兵衞

右の銘は篦書で、可なり達筆である。

（三）法隆寺西院步廊圓瓦の一に

文化　九年
申八月七日
瓦や　利介

と相當に拙い如何にも瓦屋らしい鐵釘流で書きつけてあるが、前に桃山の例に示した西の京の住人なる瓦大工利介の六七代の後胤かも知れない。さうとすると約二百年間に瓦大工が瓦屋に成下つたことになる。

＊　＊　＊　＊　＊

尙ほ江戸時代のは元祿や寶永の東大寺大佛殿のもあるが、もう澤山であらう。其上現代のもとつてないから揭げぬが、今のは大概型押である。

一番初めに書いた通り、圓瓦は半筒形の瓦に過ぎぬので、たゞ時代により厚さや形が幾分異る丈けで、私共は平安以前、鎌倉室町、桃山江戸、及

び現代の區別がやつとつく位であつて、中々細かいことは判らぬ。且つ一々詳細に寸法をとつた控もなし、仕方がないから各時代の銘文を掲げたのである。

併しながら最後に極く新しくて拙いものだが、一寸變つた例を擧げておかうと思ふ。信濃國松本市外、薄川（スヽキカハ）に沿ふて日蓮宗の圓乘寺といふ寺があつて、正面に大唐破風をかけた玄關が突き出してゐる。其正面の兩端には向て右に「浪に鶴」、向て左は下からよく判らぬが多分「浪に龜」らしいが、兎に角動物は下の方にゐて上には浪の花が散つてゐるところがつけてある「留蓋」（後出）があるが、こゝから上の方の大棟に至る迄の圓瓦には、留蓋から數へて六つ丈け雁振として用ひられたる圓瓦の上に迄浪をつけてある。だからこの圓瓦上の浪は留蓋の延長とも考へられなくもないが、一本の瓦ならさうしておいてもよからうけれども、事實別々の瓦の背に浪丈けがつけてあるのだから、此の場合は「裝飾附圓瓦」として別扱にした方がよささうである。